

中学校 第3学年 国語科 学習指導案

埼玉県さいたま市立大谷場中学校
教諭 大塚 裕也

単元名 『初恋』（1時間）

単元のねらい

- 詩のもつ文体に注意して、その特徴がどこにあるかを理解する。
- 詩の構成や展開、表現の仕方などを味わって読む。

本時のねらい 作品の概要を捉えたり、創作の背景を考えたりしながら内容を理解し、作品を暗唱する。（第1時）

指導時期 11月

「指導者用デジタル教科書（教材）」活用の意図・目的

今回の授業においては、作品の中の言葉一つ一つにこだわる読み方・考え方があることに気がつくようにしたいと考えた。そのためには、生徒それぞれが好きなところから作品を読む（考察する）のではなく、仲間とともに全員で同じところに着目しながら作品を読んでいくことが必要と考えた。そこで、「指導者用デジタル教科書（教材）」を活用することにした。

実際に「指導者用デジタル教科書（教材）」を黒板に投影することで、学級全員に同じ言葉、同じ表現について考える環境を整えることが容易にできた。特に、「国語マーカー」や「デジタルメモ」を活用し、登場人物に関する記述を色で分け、心情がわかる部分に線を引いたり、メモを書いたりすることで、学級全員で視覚的に同じ情報を共有しながら、作品を読んでいくことができるという効果が得られることを期待した。

また、「朗読」の機能を活用することで、どこを読んでいるのかが色によって表示されるため、音声とテキストを同時に理解することが不得意な生徒にも、ともに学ぶことができる支援の一助になると考えた。

本時（第1時）の展開

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
導入	● 「指導者用デジタル教科書（教材）」の初期画面を開いてコンテンツを起動する。	
	● 本時の目標と学習内容を確認する。	● 「指導者用デジタル教科書（教材）」を開き、「目標」と「みちしるべ」を提示しながら、本時の目標と活動内容を説明する。

『初恋』の作品の概要を捉えたり、創作の背景を考えたりして内容を確認め、暗唱しよう。

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
導入	● 自分自身の「初恋」に関わるイメージを書く。	● 「教科コンテンツ」内の「思考ツール」である「ウェビング」を使用して、「初恋」に関わるイメージ(例：甘酸っぱい、幼い、ドキドキ等)を引き出す。
展開	● 『初恋』の朗読を聞き、全体の概要を捉える。 ● 登場人物を捉える。 ● 『初恋』の表現技法を捉える。 ● マーカーを引くなどした本文をもとに、主人公の心情を中心に本文の内容を捉える。 ● 主人公の心情を想像させ、学習者自身の思いとも比較する。	● 「朗読」の機能を用いることで、どこを読んでいるのかを視覚的にわかりやすくする。 ● 本文の登場人物に関わる言葉に「国語マーカー」を引くことで、登場人物を認識できるようにする。 ● 『初恋』が文語定型詩であることを理解させるために、「ペン」などで五音・七音の区切りに線を引く。また、比喩等の表現技法は、「国語マーカー」を使って示し、適宜解説していく。実態に応じて、それぞれの特徴を「ペン」などでメモしてもよい。 ● 「デジタルメモ」を開き、「1」のシートを活用する。連ごとに内容を分けることで心情の変化を捉え、比較しやすくする。 ● 本文を「ぬきだす」機能などを活用すると、板書の時間を短縮でき、更に内容を一覧しやすくなる。

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
展開	● 当時の時代背景を確かめる。 * 詩を発表した当時では、「恋愛結婚」は新しい考え方であり、この詩は、当時の若者に大きな反響があったことを認識させる。 ● 便覧や辞書、インターネット等を用いて情報を調べたり、本文を口語訳したりして、内容を捉える。 ● 文語定型詩であることや、表現技法、詩に描かれた内容を意識しながら、『初恋』を暗唱する。	 ● マーカーを引いた本文を活用しつつ、足りない情報は本やインターネットなどで調べる。
まとめ	● 学習の振り返りを行う。	● マーカーを引いた本文や「デジタルメモ」を提示しておくことで、本時の学習を確認できるようにする。

「指導者用デジタル教科書(教材)」を活用したことで得られる効果

「指導者用デジタル教科書(教材)」を活用することで、授業者と生徒が本文のどの部分を学習しているのかが明確になり、発問に対して何を考えていくのか理解しやすくなる。特に、「国語マーカー」や「デジタルメモ」を活用し、登場人物の記述を色で分け、心情がわかる部分に線を引いたり、メモを書いたりすることで、学級の全員で視覚的に意見や根拠を共有することができる。板書よりも時間が短縮でき、情報を共有する手段として非常に効果的である。

また授業後には、「指導者用デジタル教科書(教材)」に保存された書き込み等を、復習する際に利用できるだけでなく、授業を受けられなかった生徒に対して提示することで、授業と同様の情報を手に入れられるような支援が可能となり、生徒の学ぶ環境づくりに貢献すると考えられる。